

FUEKI

〔特集〕 福武文化賞・福武文化奨励賞 受賞者の横顔





特集

第十五回福武文化賞に隠崎隆一氏、
福武文化奨励賞は、伊勢崎晃二朗氏、
森山知己氏、花柳大日翠氏、
NPO法人倉敷ジュニア・フィルハーモニーオーケストラに



福武文化賞は岡山県の文化の向上に著しく貢献した個人または団体、福武文化奨励賞は今後貢献が期待される個人または団体にお贈りしています。昨年10月、Junko Fukutake Hallで開催した式典で受賞者の皆さまに活動を紹介していただきました。(財団・和田)



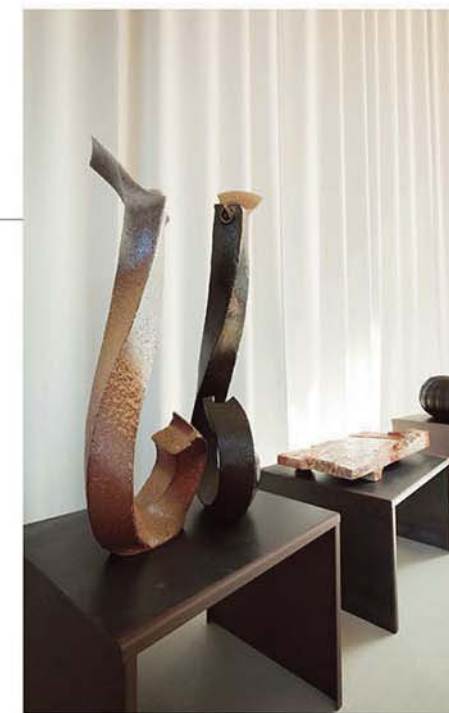
Photo:Daisuke Aochi



備前焼作家

隠崎隆一氏

様々な土が入り混じった「混淆土(こんこうつち)」を陶土として用い、形の追求に極限まで挑み、革新的な造形を導き出し、現代備前焼に新しい地平を切り開いた陶芸家。長年にわたり国内外で活躍し、後に続く若手備前焼作家に与えた影響は大きく、岡山県の伝統工芸の発展に寄与した功績が高く評価されました。



隠崎隆一氏には、「Zoi」と「ウナミストラ(時の光景)」を展示していただきました。

「どれか一点ということではなく、今まで作り続けてきたこと全体的な部分で、その活動を認めてくれたということに感謝しています」

—展示作品の一つ「ウナミストラ(時の光景)」について

「ウナミストラとは、土を混ぜ合わせるものという意味合いです。この陶土は通常粗くて不純物が多かったり少なかったり、器を作るのには不向きな土です。一般的には畑、田んぼ、山から焼き締めに向いている陶土を掘る際に上の方にある層…通常は埋戻しや廃棄処分する土ですが、陶土としては面白いです。これをどうにか作品にできないかという思いがあってこういう形状になりました。土の表情を見ると解ると思いますが、犬島の煉瓦の風景(製煉所の跡地の景色)です。僕にとって犬島には生きて、朽ち果てていく中にライブしている美しい風景があって。十数年前から犬島には何回も訪ねていて、いろんな想いがあります。福武さんの活動の一つ、犬島精錬所美術館になって島自体が様変わりしているが、その中でその風景自体を形として、想いとしてそ

のまま残しておきたかったのです。わざわざ使いにくい陶土を変化させるということで記録しておこうとしてできた作品です」

—今後について

「掘れば出てくる世界ではない。だったら今後も手に入であろう材料を基にして、それに今の人たちがいいと思っているものをプラスし、備前焼の定義の中に合えば、形にこだわる必要はないと思っています。こだわるのは現在の生活と明日からの未来。自分の絡むところの社会性のあるものにしよう、今でも同じように思っていて歩んでいます。振り返ったら、たとえ歪んでいても自分の足跡が信念といえるように繋って欲しいと思っています。これからもそういう仕事を続けていこうし、「やりたい事がやらなきゃいけない事」とすぐに置き換えると素直に進む事ができます。そうすると作品ができた時に感動の瞬間になるし、そのために生きているようなものです。自分が表現したいことを素直に形にすることを意識しています」

「手がけたいのは、あくまでも土」と常に言われているように「土」に対する隠崎氏の想いは、限りある資源を見据えた備前焼の将来に繋がっていました。

備前焼作家

伊勢崎晃一郎氏



悠久の伝統を持つ備前焼に、自らの感性と秀逸な造形力が十二分に発揮された作品が高く評価されています。先人たちが積み上げてきた伝統を受け入れつつ、現代に生きる作家として新しい何を加えることができるのか、深く問い続ける真摯な姿勢は、現代備前焼の将来を切り開く旗手として、今後ますますの活躍が期待されています。

伊勢崎晃一郎氏には、「アバロニア」を展示していただきました。

「この度は栄誉ある賞をいただきありがとうございました。伝統が続いているという土地には魔力のようなものがあって、先人たちの努力があって、現在があると思っています。先人たちへの感謝というものを40歳になって、年を追うごとにひしひしとそう思うようになりました。

ニューヨークに留学をしていた時、学生たちにこういうことをしていると説明すると、「何か表現したいものがあるのだったら、なぜそんな手間のかかる、時間のかかることをやっているのか」と質問され、いろいろと考えさせられました。アメリカには、備前焼のように長く続く伝統とはかなり違うものがあります。ニュートラルに、「じゃあ自分は何がしたいのか？」というところを驚かすにしている人が多いです。それはすごく刺激になりました」



日本画家 森山知己氏

日本画家であると同時に伝承されるべき描法や画材、描画道具の研究にも尽力され、特に全国的に注目された尾形光琳作「紅白梅図屏風」の再現は高い評価を得ました。近年は岡山県天神山文化プラザで企画・運営に携わるなど、積極的に岡山県の文化芸術全体の発展・普及に取り組み、今後益々の活躍が期待されています。



森山知己氏には、「白象図」を展示していただきました。

「日頃褒められ慣れていないので、とても嬉しく思います。見てくださる方、応援してくださる方がいるということで大変ありがたく思っています。日本に生まれて、日本人として生きていますが、国の名前がついた絵というものはどういうものなのか？という好奇心が今の制作につながっています。その対象は、材料や、地域との関係、自然にも及びます。

「紅白梅図屏風」の再現に取り組み、今回一番気づかせてもらったのは、水の性質についてです。例えば、垂らしこみという技法が琳派の中でたくさん使われていますが、水の中で絵の具が沈んでいく時間、その時間をちゃんと待てるかどうか。人間の時間に合わせた表現をする道具を西洋ではたくさん作っていますが、日本画に使われている材料は、古い時代から今に関わらず、きれいな発色であるとか、良いなと思える価値観を自然に添う形で成立させています。自然と水の性質をわかめることを一番大切に思って制作しています」



日本舞踊 花柳大日翠氏



人間国宝・花柳寿南海に師事し、現在最も飛躍が期待されている若手日本舞踊家。古典のみならず時代性を盛り込んだ創作舞踊にも挑戦し、自己研鑽に努めている姿勢は、日本伝統芸能界に活力を与えるとともに、日本舞踊を通じて日本文化の継承と発展に大きく貢献することが期待されています。



花柳大日翠氏には、笛・囃子・舞踊による「日本の四季・春夏秋冬」を披露していただきました。

「これまでは自分の作品、踊りのことのみをひたすら考えてきました。これからはこの賞のご恩返しができるように、スケールを大きくしていけるよう努めていきたいと思います。そうすれば、いろいろなことを教えてくださる先生や先輩たち、また伝統芸能にもご恩をお返しできることになると思います。

90歳の師匠は、今でも創作品を発表されています。その影響で私も創作をよくなるようになりました。今回も新たな作品で、構成は古典の手がたくさん入っている作品ですが、日本には四季があって、その日本特有の四季の中で日本の着物を着て踊るというところを大事にしている作品です」

NPO 法人倉敷ジュニア・フィルハーモニーオーケストラ

青少年の音楽的な技術向上のみならず、社会性や協調性の育成を目指し、倉敷市を拠点に昭和59年設立。以来、県内のジュニア団体のパイオニアとして、オーケストラ活動の普及促進に取り組み、世界で活躍する多くの音楽家を輩出しています。30年にわたる活動は、地元音楽文化の一翼を担うまでに成長し、今後も更なる意欲的、継続的な活動が期待されています。

NPO 法人倉敷ジュニア・フィルハーモニーオーケストラからは、OBの江島直之氏と岸本萌乃加氏に受賞の言葉と演奏を披露していただきました。

「このたびは、福武文化奨励賞をいただきまして誠にありがとうございます。4歳から大学生まで幅広い年齢層の子どもたちが、オーケストラを通して、音楽の楽しさはもちろん、思いやりや協調性まで多くのことを学びます。私たちもこのオーケストラで音楽の大切さを教えてもらいました。そして音楽の専門の道に進むことを決め、勉強を続けています。今後は海外で音楽の研鑽を積み、倉敷ジュニアフィルの子どもたちに、夢や希望につながる音楽を提供していきたいと考えています。これからも温かく見守っていただけると幸いです」



地域と教育界・経済界の連携で教育力向上の取り組みを—。

今回の学力向上アドバイザー座談会では、地域と教育・経済分野の教育課題や取り組みについて、また、子どもたちに学びの意義を理解してもらうためのキャリア教育について有識者の方にご意見をお伺いしました。進行は当財団・宮野正司議員です。(財団・児子)

それぞれ異なる立場で子どもとの関わりを持たれている中で、学力向上への取り組みについての報告をお願いします。

芦田——美作大学では最初、県の事業として「わくわくスタディー」という土曜日学習を始めたのですが、取り組みから2年目の終わりに小学校・地域・市教委と連携し、大学の教職実践演習として今日の放課後学習の形になりました。

1年間に25～6回、美作大学の児童学科4年生が、津山市・美作市の小学校で授業を行っています。放課後学習については文科省が推奨していますが、大学が地元の小学校や地域と協力して取り組んでいる事例はまだ少ないでしょうね。現在では9割の子どもたちが参加しています。

学習内容については学生自らが指導案を立て、めあてを決めて資料作成を繰り返し、試行錯誤しながら教壇に立つので、教育実習が終わってからの1年間に現場で学ぶ貴重な経験となります。子どもたちひとりひとりのフォローについては担任と随時連携をとっていますが、授業は学生のみで展開しているため、教師としての自信が付き、実力も養うことができていますと確信しています。今年で2年目ですが、地域・保護者も今後の継続を望まれており、近隣小中学校からも要請があるため、実績が伴ってきたのを実感しています。

上野——井原市では、地域の取り組みとして教員退職者や地域のお年寄りに月2回土曜日に公民館で地域学習サポートをしてもらっており、多くの児童生徒が学習しています。

「いばら子生活リズム向上プロジェクト」においては、早寝、早起き、朝ごはん、読書、体力づくり、テレビ視聴時間、スマホ利用についての調査をした結果、朝ごはんを食べていない子どもが多く、当面の改善策としていかに保護者から教職員までプロジェクトを落とし込んでいくかを課題としています。また学校現場では、学力の基礎基本をどう活用し、活用するために基礎基本がどう必要になってくるか、という両輪から学ばせることに重点を置いて取り組んでいます。

鈴森——青年会議所では、教育に関する視点から学ぶことの楽しさ・大切さを感じてもらうため、また、夢・希望をもってよりよく生きてもらうための場を提供しています。一例を挙げると、うらじゃ、吉備津の歴史を学ぶ事業、林修先生の講演会、職業体験などを行ってきました。職業体験は特に好評で、次回開催も決まっています。

市議・学校・教育委員会との議論の中では、どんな事業をしても意識の高い親ばかりが集まる傾向があり、本来体験してほしい、参加してほしい子どもたちは集まらないという点が挙がり、集客についても今後工夫していきたいと思っています。家庭学習の時間、家庭環境が非常に重要な中、非行の発生、校内暴力率なども含め、子どもたちが健全に育つ環境が整っておらず、学力向上の基礎基本となる「勉強する環境」が特に少ないため、今後は学校・地域・行政の連携を図り、どのように街づくりを進めていくかを課題として取り組まなければならないと考えています。

学力の地域格差、家庭格差についてどのように考え、どのような取り組みをされていますか？

上野——PTAでは、地域の教育力として地域行事に保護者が参加し、しっかりと関っていくほどこいじめや不登校が少なく、学力も安定するという“ソーシャル・キャピタル”の概

念を啓発しています。その中で、基本的生活習慣の構築や自ら学ぼうとする基礎基本、やり遂げる力、社会人として生きていくための教育などを保護者向けに発信しています。

飯田——現在はどんな環境であれ採れる情報は等しいので、家庭の格差は都市部も郡部もどの地域でも同じです。(非行)少年たちは共通して基礎学力が不足しているで、まず就職や人に対する際に必要な挨拶や礼儀作法を教えているのですが、小学校に上がるまでの家庭教育で学ぶべき時期に学んでいないことの辛さ、不幸さを感じます。

家庭環境の改善のため保護者向けの講演会をするのですが、子どもたちを育てている大人たちが自分の生活や行動を振り返るきっかけになれば意味がなく、より多くの方に参加していただけるよう、来てもらうのではなく集まっているところに赴くという作り方をしています。

中高生にもなると、無気力で机に伏している子が目立ちますよね。それは自分が何をやる時間かが判断できていないからであり、それを解消するためには目標を持たせ、そのための学びであることを教える必要はないと思います。目標、つまり将来のキャリア、働くということの実践、生きるため、夢のためにどうなりたいかというイメージをもってもらいたいですね。岡山ではキャリア教育が足りておらず、もっともっと重きを置いていくべきではないでしょうか。保護者は見守って応援するだけではなく、保護者自身が学習意欲をもって取り組む姿を見せれば、子どもも世の中も変わっていくと思います。

小川——備前市では「学び塾」を通して、学習支援はもちろんのこと、生活の基本となる規律が守れるか?という観点で、地域のおばちゃん的な役割として、自転車の並べ方、トイレの使い方、挨拶、掃除の仕方など、独自のマニュアルを作成して指導しています。子どもには、その都度目標を立ててきちんと達成できたかどうかを書き留めさせ、それらをファイリングしたものを親に確認してもらうようにしてはいるのですが、

目を通すことさえしない保護者もいるのが現実です。しかし、地域の支援員と子どもたちがつながることで、保護者の姿勢も変化しているのを感じているので、家庭環境もよりよくなっていくのではないのでしょうか。

今後、当財団に望むものは何でしょうか？

鈴森——親としての意見ですが、キャリア教育にも繋がる人間力を鍛える体験活動にご支援いただきたいです。自分たちも町づくりに特化した団体なので、今後も汗をかき共にやっていきたいと思っています。

小川——タブレットなどの機器を配布した後、きちんと使いこなせるだけのフォロー研修のようなものを主催していただきたいですね。

芦田——母親は話を聞く機会があるのですが、父親向けの講演などは少ないのが現状です。企業でも、父親が幼児からの家庭教育の大切さを学ぶ事業や講話などを開催していただけないでしょうか。

上野——研修会を開催しても保護者が集まらないのが現状で、何か集客アップにつながるアイデアがあれば教えてほしいです。また、人員補充をしていただければ一番ありがたいですね。

飯田——具体的には学校に行っていない自立支援の子どもたちに対しても、教科書を取り揃えて読みながら学習をしていけるような教材・プリントを提供していただき、生きる力として学習させてやりたいです。そのような子どもを抱える家庭は、保護者に対してのサポートも重要であり、保護者にも夢や希望を持って子育てをしてもらえるような環境を作っていけるよう、社会教育に力を入れて助成をしていただきたいと思います。



美作大学児童学科 准教授

芦田愛五氏

岡山県教育委員会 社会教育委員

飯田純子氏

井原市 PTA 連合会 会長

上野康博氏

備前市伊部公民館 館長

小川道代氏

岡山青年会議所 前理事長

鈴森賢史氏

福武教育文化振興財団 評議員

宮野正司氏

大学と小学校とが連携した放課後学習を実施し、学生の育成にも尽力している。

美咲町で学校支援事業のコーディネーターとして活躍している。平成25年度第13回谷口澄夫教育奨励賞受賞者。

保護者への働きかけにも注力し、家庭教育の充実と基本的生活習慣の育成に取り組んでいる。

公民館での放課後学習や長期休業中の補充学習を通して、地域と家庭の連携を支援している。

経済の分野から、子育てイベントの開催など多岐に渡って教育環境を提供している。

2001年～2005年の5年間に渡り、岡山県の教育長を務める。

大学との連携による学力の底上げを目指して

放課後等学力補充研究会 代表 渡邊義雄

(平成26年度教育研究助成)

美作大学では平成25年度より津山市、美作市の小中学校と連携し、教職課程で学ぶ学生を放課後や長期休業中の個別指導を中心にした補充授業に派遣する取り組みを行っています。

津山市立弥生小学校では昨年度、放課後の個別補充学習として行っている「げんぼ学習」へ学生を派遣してもらいました。子どもたちは大学生に教えてもらいゆったり、じっくり勉強することで、「わかった」「できた」ということを実感できるようになります。「できる喜び」は子どもたちの学習に向かう気持ちをさらに高め、毎日の授業の中でも自信となり、学校全体としての学力向上へつながります。

「げんぼ学習」への誘いは担任が行います。時には、家庭訪問をして、保護者ともじっくり話を子どもに引き出し、参加を募ります。あくまでも、子どもは自分の意志で参加し、保護者もそれを応援しています。

名称の「げんぼ学習」は、郷土の偉人箕作阮甫(みづくりげんぼ)の名前をとって子どもたちにとっても、「『阮甫先生のようにになりたい』と、やる気を起こすのでは」と、村上校長先生は言います。

週に1回ですが、午後から学習ボランティア(スクールフレンド)として、子どもたちとじっくり関わってくれる大学生たちの存在はずいぶん大きいものがあります。指導の仕方や教材の考え方には未熟なところもあるようですが、小学校の先生たちと事前にしっかり打ち合わせを行ったり、アドバイスを受けて、丁寧に指導に当たっています。

また大学の先生や小学校の先生の指導を受けて、学生同士で自作の教材プリントをつくったり、指導の仕方について熱心に話し合ったりして、現場の先生の良い刺激にもなっているそうです。

「学生たちは将来、教師になろうとしているわけですから、一人の指導者として現場がしっかり支え、育てなければいけないと思います。学校も助かるし大学にも効果がある。お互いがプラスの関係を持っていければ長続きしますし、得ることも大きいと思います。第一、子どもがずいぶん喜んで勉強していますね。」

校長先生の話から、一石三鳥という言葉が浮かんできました。

今年度も美作大学では小中学校8校へ学生を派遣しています。(取材・文／平山)



教育課題解決の糸口を求めて...

活動リポート

子育てや教育の課題が多い中、大学の学識や研究活動の成果を学校・家庭・地域へ還元し、互いに連携しあう子どもたちの豊かな成長や学びを支援しようとする試みが行われています。今回は、大学と小学校、大学と行政・地域の団体が連携した2つの取り組みを紹介します。(財団・平山)

放課後児童クラブにおける指導員向け教材開発

くらしき放課後児童クラブ大学連携研究会 代表 赤木恒雄

(平成26年度教育研究助成)

倉敷市には、平成26年4月現在63小学校区に78の放課後児童クラブがあります。本研究は、倉敷市、倉敷児童クラブ運営委員長連絡会と連携して、放課後児童クラブの充実に向けて、指導者・子ども向け教材を開発することを目的としています。

放課後児童クラブは、来年度変わろうとしています。それは児童福祉法の改正により、厚生労働省令として設備及び運営の基準ができることです。また市町村では条例ができ、それを最低基準としています。大きな変化の中、放課後児童クラブは、子育てに欠かせない事業として位置付けてきています。

放課後児童クラブの変化とともに、保育内容の充実が急務の課題となりました。特に気になる子どもが落ち着いて生活できる環境をつくるのが課題の一つです。

そのような中、保育内容の充実に取り組むために平成23年よりくらしき作陽大学と放課後児童クラブとの連携が始まりました。気になる子どもを理解するために研修会を開催したり、実践検討会を行い、関係を築いたりする中で、放課後児童クラブと大学が互いに学び合い、保育内容の充実につながりました。またくらしき作陽大学の学生が十数名アルバイトとして直接子どもの支援にかかわっており、実践的な力量を身につける機会にもなっています。

連携を通して保育内容が充実する中、放課後児童クラブにも行動の背景を共通理解し、一貫したかわりが気になる子どもの支援には欠かせないことがわかってきました。そこで、支援における学童保育固有の教材が必要となり、まずは指導員向けの教材を作成することになりました。また、これらの作成過程の中で事例検討会を月1～2回実施し、児童クラブの指導員、大学教員、学生が参画し、「共に学ぶ場」とすることにしました。

教材には挿絵がある方がわかりやすいので、倉敷芸術科学大学の専門家の先生方にも参画していただき、三者の連携として、学生指導も含め、進めることになりました。特に学生においては、特別支援教育系の行動・学習支援演習の一部に位置づけアクティブラーニング授業を展開していきます。特別支援に強い学生を育成することも大きなねらいなのです。

「学童保育における気になる子どもの支援ハンドブック」として作成し、研修会、事例検討会のみならずいろいろな場面で活用できる教材として、活用場面、活用方法の工夫等を進めていきます。(執筆者／橋本正巳、若井暁)



助成対象者にはさまざまな人がいます。地域でユニークな活動をしている人、伝統や歴史を掘り起こしている人、地域資源に新しい価値をみつける人。この「FACE」ではそんな人々に会いに行きます。

菅原さんと認知症の出会いには高校生の時。共同生活を始めた認知症の祖母は、タンスの中にいる小人にご飯をあげようとして、ディスプレイで出会った男性が「迎えに来た」と言っている間に家を抜け出したりしたそうです。「祖母のボケを受け入れた方がいいのか、正した方がいいのか迷っていました。その時の経験が介護士という職業を選ばせたのかもしれない」

映画や小説が好きだとう菅原さんは、演じるより物語を作ることに興味を持っていました。高校3年生の時、大学のオープンキャンパスで劇作家・演出家の平田オリザさんの演劇ワークショップに参加して、演劇の可能性の深さに驚き、それ以来、本格的に演劇に関わっています。

介護施設で働き始めて「老い」「ボケ」「死」と向き合うようになり、人間ってなんだろう？生きるってなに？と考える時間が増えた菅原さんは、同時によりよく生きることも考え始めました。「僕が今まで生きてきた社会は進歩主義。人はどんどん成長しないといけない社会の中で息苦しさを感

じていました。しかし介護施設のお年寄りほとんど衰えていきます。今までの価値観が全てくつがえされました。時計屋の主人になったり、息子になったり演技をしながら介護している自分がいることに気づき、介護と演劇は相性がいいと直感で感じたそうです。

「老いと演劇」Oibokkeshiは、暮らしている和気町で何かしたいとの思いから菅原さんの他、デザイナーの岡野雄一郎さん、アニメーション作家のあさのいさん、建具店の市川博明さん、編集者の野坂牧子さん、ボーカル講師の古川恭子さんの6名で1年前から活動を始めました。

活動の二つ「老いと演劇のワークショップ」では、介護現場で既に実践されている演劇的手法「遊びリテーション」、認知症の高齢者とのコミュニケーションについて「演技」という媒介を通して考える「ボケと演技」、認知症になった「わたし」を体験するための演劇シーンを創出する「老いを演じる」などを体験します。菅原さんの体験談や介護施設の実態からは「介護と演劇」の相性がいいこと、「ボケ」を受け入れる演

技を体験してみると自分の態度（演技）で他の人に与える印象が変わることを実感しました。

「お年寄りは個性が煮詰まっていて、強烈な存在感と人生のストーリーには濃密なものを持っています。それを引き出して演劇をつくりたいと思いました。老いを笑いで受け止め、観光資源にし、多くの人に来てもらえたらと考えています」

進歩主義の現代社会から目をそむけられていた「老い」を地域資源として、演劇という手法を用いた新たな文化を創るという挑戦が始まりました。（財団・和田）

菅原直樹／すがわらなおき

「老いと演劇」Oibokkeshi代表

2012年千葉県から和気町に移住。移住前は小劇場系の劇団に所属し俳優として活躍。現在、介護福祉士として働きながら「介護と演劇は相性がいい」を合言葉に、地域における介護と演劇の新しいあり方を模索している。平田オリザ劇作家・演出家率いる青年団所属。



「老いと演劇」Oibokkeshi 代表 菅原直樹

菅原直樹

認知症徘徊演劇『よみひちにひはくれない』

日時＝2015年1月18日（日）14:00～
会場＝和気町駅前商店街周辺
料金＝一般2,000円 中・高校生1,000円 小学生以下無料
※完全予約制（各回定員10名まで）※雨天中止
問い合わせ＝「老いと演劇」Oibokkeshi
Tel 0869-92-2313（月～金10時～16時） Mail oibokkeshi@gmail.com
Web https://www.facebook.com/oibokkeshi

演劇の可能性に挑戦

高齢化率が約36%と岡山県全体の高齢化率を上回っている和気町。超高齢社会の大きな課題に立ち向かうにあたり、「演劇」を通じて「老い」を明るく受け入れる新しい文化を創り、地域を活性化させようと取り組みを始めた「老いと演劇」Oibokkeshi代表・菅原直樹さんにお会いして来ました。

私が国吉康雄を好きな理由



「黄色い服の婦人」中国銀行蔵

公益財団法人 福武財団
福武コレクション国吉康雄プロジェクト

江原久美子

絵画を良い状態で保存していくために、修復専門家に依頼して状態をチェックしてもらうことがあります。絵画作品は、注意して保管していても長年の間にホコリが付いたり、木枠が歪んだり、絵具層に細かい亀裂が入ったりするので、定期的なコンディションチェックとメンテナンスが必要です。

先日、国吉康雄の「安眠を妨げる夢」という作品のコンディションチェックを行いました。作品は額装と表面の亚克力板を外した状態で、作業机に平らに置かれます。修復家は至近距離から画面に光を当て、ミリ単位で状態を見ていきます。その様子を近くで見ていると、普段は気が付かない作品の姿が見えてきます。

「安眠を妨げる夢」の背景には、白いテントのようなものが描かれています。白く塗られた画面の奥に別の色があり、そしてさらにその向こうにも色があり。そしてさらに・・・と、平面の絵画にも関わらず、そこには深い奥行き、空間がありました。表面の白も、その向こうの奥行きも、光を当てると本当に美しく輝きます。

この、色のうつくしさと奥行きは、印刷された図版ではなかなか見えないものです。図版を見て「何が描いてあるか」「そこにどのような意味があるか」だけを論じるのはもったいない、国吉が自らの目で色を選び、自らの手で筆をもって一筆一筆塗り重ねた、結晶のようなうつくしさが、この作品の力だと思います。

コンディションチェックでなくても、国吉の筆遣いの美しさにはとすることがあります。先日「日本の張り子の虎とがらくた」という作品を至近距離で見ていたとき、張り子の虎の黒い縞模様が、素早く、しかし非常に的確に描かれていることに改めて気づきました。

国吉康雄を研究するにあたり、彼自身の波乱に満ちた人生や時代背景はもちろん取り組むべきテーマですが、私が国吉を好きな理由、というより信用できる理由は、まずは彼自身の目と手の上手さ、センスの良さです。ごくシンプルな理由ですが、これが他の人には真似のできない国吉康雄の力だと思います。



絵画修復家・岩井希久子さん（右）のアトリエで

青地大輔

一日の仕事を終え、カメラとともに夜の森に入る。
最近そんな時間が増えている気がする。

つい数日前まで聞こえていた虫の音はもう聞こえない。
近くを流れる沢の音が森に響く。

木々の隙間から見える星空を撮影し、
寒さに耐えながら夜が明けるのを待つ。

光がない夜の森の草木は眠りに入り、
酸素を吸って二酸化炭素をはきだす。

そして、夜が明けると太陽の光からエネルギーを代謝し、
二酸化炭素を吸収して酸素をだす。

夜明け前、気がつくとき気温は5度まで下がっており、
周囲は夜露で濡れていた。

熱帯びたオレンジ色の光が森の真横からさしたすと、
幾つも折り重なるように絡んだ草花に光の雨が降りだす。

その光景は、宇宙（そら）から注がれた光のエネルギー
のようにも感じられ、ほんの数時間前まで見ていた星々
の輝きのようにも見えた・・・。

あおちだいすけ／写真家、ブルーワークス PHOTO & DESIGN Office 代表、犬島時間実行委員会代表。1973年岡山市生まれ。写真及びデザイン業を営むとともに2004年よりアートを通じ、コミュニケーションを図ることを目的としたプロジェクト「犬島時間」を企画主催。人材の育成と発掘・地域づくりに取り組む。2013年福武文化奨励賞、岡山市文化奨励賞受賞。

Editor's Column

2015年が始まり早1ヵ月。皆様今年はどのような年になりそうですか？

年齢を重ねるごとに1年がどんどん短く感じるものです。これは「ジャンネーの法則」といって、『主観的に記憶される年月の長さは年少者にはより長く、年長者にはより短く評価されるという現象』だそうです。同じ1年でも5歳の子供にとっては人生の5分の1、50歳の人にとっては人生の50分の1、と言えはわかりやすいでしょうか。

法則があるからといって「大人の1年は短い」と嘆くことなく、ひとときでも充実感を感じられれば時間は長く感じるもの。そのためにも毎日小さな感動を見つけながら過ごせると素敵ですね。

さて、今号の記事に学力向上アドバイザー座談会の内容をまとめています。教育に携わる各方面の方々にお集まりいただき、貴重なご意見をいただきました。学力向上はもちろんのこと、特に子どもたちに対するキャリア教育や、そこへ繋がる子どもたち自身の人間力向上が大切、という意見がとても印象的でした。

「将来、自分がやりたいことを見つけることは大事だが、10年後、20年後、自分たちにはどのような未来が待ち構えていて、どういう人物が必要になるのか。それを考えることも、あなたたちにとってとても大事なことだ」

数年前、福武総一郎理事長が当財団の事業であるオーストラリア・プレ体験留学に参加した生徒へ話した言葉です。

一年一年、世の中は確実に変化しています。始まったばかりの2015年がどのような1年になるのか。さらに未来は…？ 私も今年は少し客観的な視点から目標を立て生活したいと思います。（財団・植月）

機関誌

不易

F U E K I vol.56 2015.1.25

題名「不易」には、「時代を超えて優れたものに共通する本質的なもの」を大切にしたいという谷口澄夫初代理事長の思いが込められています。

編集・発行：

公益財団法人 福武教育文化振興財団

〒700-0807 岡山市北区南方3-7-17
株式会社ベネッセコーポレーション本社3F
TEL 086-221-5254 FAX 086-232-3190
URL <http://www.fukutake.or.jp/>
E-mail eczaidan@fukutake.or.jp

制作：
株式会社 吉備人
デザイン：
田中雄一郎(QUA DESIGN style)
印刷：
広和印刷株式会社